

Wesley Hall News

ウェスレー・ホール・ニュース

March, 2025 No.147



求めなさい。
そうすれば、与えられる。

ルカによる福音書 第11章9節

イエスとは何者か

大学宗教主任

福嶋 裕子



イエスは言われた。
「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」

マタイによる福音書 16章15節

イエス様が生きていた時代、多くの人がイエス様が何者かを言い当てる
ことができませんでした。「洗礼者ヨハネのようだ」、「預言者エリヤのよ
うだ」といろんな意見がありました。

今の私たちは、キリスト教のおかげで答えることができます。聖書の続
きに書いてありますように、ペトロが言ったことが正解です。「あなたは
メシア、生ける神の子です」。メシアとは、ヘブライ語で「油、注がれた者」
を意味します。古い時代のイスラエルでは、「油」は「神の力」を象徴し
ました。油注ぎは、油を動物の角に入れて、頭から注ぐ儀式で、油を注が
れた人は王に即位します。王様は「神の力」を注がれた人なのです。その
儀式は、イエス様が生まれる一千年ほど前からありました。その一千年の
間に、メシアについての概念が変わっていきました。メシアとは単に王様
を指すのではなく、神によって力を与えられ、世界に平和をもたらしてく
れる人のことだと考えられるようになったのです。「世界平和」。聞くだけ
で、怪しい宗教のようです。しかし後一世紀のローマ帝国の住民は、切に
平和を求めています。現代と同じく、至るところで地震や洪水、疫病や

戦争が起きて、生きることの困難さを人々は経験していたからこそ平和を願ったのです。平和を実現させるリーダー、そのような意味でのメシアです。ただ問題は、どのようにして平和をつくり出すのか。

現代がそうであるように、イエス様の時代も意見が分かれていました。ある人々は、武力で平和を維持しようとします。ある人々は、経済の繁栄を求めます。ある人々は、政治権力によって平和を作り出そうとします。軍事力、経済力、政治的権力、このどれか一つを選びなさい。その力をあなたにあげよう、と言われたらどうしますか？

イエス様もこのことを考えられたようです。悪魔がイエスに囁きました。軍事力、経済力、政治的権力のどれか一つを、あるいはその全部をあげるから、悪魔と一緒に行動しよう、と（マタイ 4:1-11）。

イエス様の答えは、「否」でした。その代わりに「神の国」について教えられ始めました。「国」とは、ギリシア語では「バシレイア」と言います。バシレイアとは統治、支配領域のことです。神様は愛の御方ですから、「神の国」とは「愛が支配する場所、領域」になります。イエス様の教えをまとめると、神様の愛を「今、ここで」互いに示すことができるということです。その教えの通りに、イエス様は神の愛を実践されました。イエス様がなされたことを「イエス運動」あるいは「バシレイア運動」と聖書学では呼びます。神の愛を実践することは、簡単ではありませんが、その教えに共鳴する人たちはいたのです。

しかし「イエス運動」は挫折しました。リーダーだったイエスが、ローマ帝国の権力者によって殺されてしまいました。軍事力、経済力、政治の力を用いずに、個々人がその内側に持っている愛する能力に気がついて、その内面的な力によって平和をつくりだすことは不可能にさえ見えます。

「イエス運動」は、頓挫しました。しかし時代の中で何度も違う形で、さまざまな非暴力の形態をとって、イエスの精神、スピリットは息を吹き返し、バシレイアのビジョンは生き続けています。

皆様が、卒業後も、自分と他者が共にいきいきと生きる道はどこにあるのかを真摯に探求し、一生を賭けても良いと思えるビジョンを見つけ出せますように。

卒業する、いま

新しい一歩を踏み出す人、仲間を送り出す人——
幼稚園から大学みなさんに、いまの想いを聞きました。

幼稚園教諭 矢部 尚子

卒園する大切な皆さんへ

ご卒園おめでとうございます。年少組の4月。お家の方と離れることにドキドキして涙する方もいましたね。その姿も愛おしく「大丈夫よ」と受け止めたことを思い出します。あれから積み木の船に乗って恐竜を探す旅をしたり、ロボットカミイの劇ごっこをしたりと、皆さんの好きな遊びを幾つしたことでしょう！どれも真剣で愉快でした。時には友だちと喧嘩をしたり、悔しい思いもしましたね。私も共に向き合いながら、その必死な姿に心を動かされました。

そしてキャンプや運動会、大切にささげたページェント等々。そのどれもにドラマがあり、多くの経験を重ねて皆さんは大きくなりましたね。振り返るといつも神さまが共に歩き、助けてくださいました。



「恐れるな、私があなたと共にいる。たじろぐな、私があなたの神である。私はあなたを奮い立たせ、助け私の勝利の右手で支える」(イザヤ41:10)
この先も神さまを信じ、神さまと共に豊かな時を歩まれますようにいつもお祈りしています。



幼稚園保護者会会長 三澤 志保

卒園に寄せて

たくさんの思い出ができた幼稚園を卒園する日が近づいてきました。この特別な瞬間を前に、さまざまな思いが浮かびます。

ドキドキしながら初めての一步を踏み出した入園式。先生方やお友達とふれあう中で、笑ったり、泣いたり、

お友達を思いやり、神様に感謝することの大切さを学び、日々成長していく姿を見守ることができたことは、家族にとって大きな喜びでした。

普段見逃してしまうようなことの中に様々な発見があり、何が大切なのか、という感覚をこの幼児期に養っていたように感じます。「ありがとう」や「ごめんね」といった言葉を自然に口にする姿を見て、改めてその大切さを実感しました。

どんな時でも子どもたちに寄り添ってくださる先生方、一丸となって協力して下さった保護者のみなさま、保育に関わって下さった全ての方々に感謝申し上げます。

これからの初等部生活に向けて、少しずつ成長していく姿を見守りながら、幼稚園で学んだことを胸に、自分自身を信じ、他者を思いやる心を持った優しい人間に成長することを願っております。



初等部教諭 浦上 動太

自分に与えられた賜物とは

突然ですが、皆さんは「青山学院初等部で学んだことは何ですか」と問われたら何と答えますか？私が、この2年間過ごした中で1番学んだことは「賜物」についてです。この2年間、「賜物を活かすこと」が学年目標に掲げられていました。聖書の中にも「あなたがたは、それぞれ賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を用いて互いに仕えなさい。」（1ペトロ4：10）とあるように、私たちはいつも神様から与えられた自分の賜物を周りの人のためにどのように使うかを考えてきました。皆さんは、この初等部で、たくさんの人や自然と出会い、初等部でしか味わえない経験をしてきたはずですよ。そしてどんな場面でも自分に与えられた賜物を活かし、力を発揮しようとしてきましたね。卒業を機に、自分に与えられた賜物を見つめ直すとともに、更に磨き続け、今後もサーバント・リーダーとして活躍していくことを心から祈っています。





初等部6年 渡辺 愛佳

地の塩、世の光

私は5年生の3月に、学院のフィリピン訪問プログラムに参加した。そこで私は何より、「人々の優しさや明るさ」を感じた。みんな、貧困の生活の中で家族のために一生懸命に働き、私達とも笑顔で仲良く遊んでくれる子ども達なのだ。このような人々に囲まれた7日間は、本当に幸せだった。まさに人々は「地の塩」だった。

その後、私達宗教プロジェクトを中心に「主は共におられます」というパネルを、初等部生の手形を並べて作った。一緒にフィリピンに行った仲間のアイデアだ。この作品は、青山学院全体やフィリピンの人々の心のエネルギーになるように全校で作り上げた作品であり、学院の「希望の未来図コンテスト」で「世の光賞」を受賞することができた。

私は6年生になり、「自分の本当の気持ち」について考えるうちに「地の塩、世の光」として心から行動をすることの嬉しさを改めて実感している。今後の日々の生活でも、フィリピンの人々やパネルを作った初等部のみんなのような行動をし、頼られる大人に、そして「地の塩、世の光」になれるよう過ごしていきたい。



中等部教諭 野間口 カリン

弱いときこそ

3年生のみなさんが中等部に入学したのは、パンデミックの影響が残っていた2022年4月でした。マスクをつけて入学式に臨み、その後も1年以上黙食が続きましたね。そのような中で中学生となったみなさんは、いろいろなことが決して容易にはいかなかったと思います。それでも前向きに中等部生活を楽しんでいるみなさんと日々を重ねていくうちに、私はみなさんの素直さや優しさ、あたたかさによくふれてきました。76期の担任の一人であったことを私はとてもうれしく、また誇りに思います。

みなさんの卒業にあたって私は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」(Ⅱコリント12:9 新共同訳)を贈ります。

キリストの恵みと神の力は、人間の弱さの中でこそ発揮されるということ。2000年前のベツレヘムに「強さ」の象徴を一つも持たないで誕生し、「小ささ」や「弱さ」の極みを生き抜いたイエス。私たちがそれぞれの人生において、困難を感じ、弱さに打ちひしがれそうなときこそ、自分の力によってではなく神さまの力によって生かされていきたいと願います。

ご卒業おめでとうございます。

中等部 3年 中田 まき

自然と共に

私は3年生の夏休みに緑蔭キャンプに参加しました。避暑地に行き、聖書を学ぶことで、夏を涼しく穏やかに過ごしたいという思いからです。緑蔭キャンプでは、自然にまつわる聖書の教えを学びました。山登りをしたり、川辺でご飯を食べたり、都市では味わうことのできない自然と実際に触れ合うことで、心が安らぎました。

神様が与えてくださったこの自然。元来私たちの住んでいるこの場所も全て緑だったのです。自然は私たち人間の所有物ではなく、神様のものです。しかし、人間が自分たちの利益だけを考えて、勝手に自然を壊してしまいました。自然は人間が好きなように使っていいものではない、このことを緑蔭キャンプに参加し学びました。今まで私自身も自然に悪影響を及ぼすような、身勝手な行動から目を背けてしまっていました。自然と人間がどうすれば共存できるか、これからは思案していきたいです。





(PS講堂 3年席からの眺め)

高等部教諭 井川 比奈子

すべてがきっと、糧になる

初めて高等部に来た時、「クラス最高！部活の仲間大好き！行事バンザイ！」と、友人とともに学校生活を全力で楽しんでいる生徒たちの姿に驚きました。しかし同時に、その雰囲気になじまず、居心地が悪そうにしている姿もありました。皆さんはどちらの姿に自分を重ねるでしょうか。

学校生活が楽しかった人へ。あなたが過ごした時間は、神さまからのプレゼントです。充実した日々を送ることができたのはなぜか、そのために自分は何をしたか、誰かがしてくれたことは何か。その一つ一つを胸に刻み、大切にしてください。

学校生活に苦しさを覚えていた人へ。その苦しみも神さまからのプレゼントだったのだと思える時が、いつかきっと来るはずです。あなたの悲しみや痛みは前に進むための力となり、誰かの涙に寄り添い、心を慰める助けとなります。

「私の魂よ、主をたたえよ。そのすべての計らいを忘れるな。」
(詩編103：2)

高等部ですごした日々のすべてを糧として、主にあって豊かな実を結ぶ人生を送ることができますように。

高等部 3年 荒川 由友奈

高等部での学び

3年間の高等部生活は、生徒主体の良さで溢れていたと思います。特にそれを実感したのは、集会委員長として6月のミュージックフェスティバルを企画、運営したときでした。全校生徒が楽しめる行事を目指し、仲間とともにアイデアを出し合い、何度も話し合いを重ねました。当日、トランシーバーのイヤホン越しに聞こえた全校生徒の歓声とペンライトが音楽に合わせて揺れている景色は夢のようでした。この行事をよりよいものにするために新たなことに挑戦し、一人ひとりの意見を実現できたのも、生徒主体の行事運営だったからだと思います。この経験は、青山学院のモットーである「地の塩、世の光」に通じるものであり、私自身が他者のために尽くすことの意味を教えてくださいました。これからもここで学んだ価値観を大切に、互いを尊重し、神様の愛を分かち合える存在であり続けたいと思います。

卒業は一つの終わりであると同時に、新たな挑戦の始まりです。青山学院高等部での学びに感謝し、未来へと進んでいきたいと思います。3年間ありがとうございました。



国際政治経済学部教授 渡邊 千秋

卒業なさる皆さんへ

ご卒業おめでとうございます。

新たな人生のフェーズに進む皆さんに贈る言葉を書くこととなり、聖書の「放蕩息子のたとえ話」の場面を扱った絵画に触発されて書かれたH.ナウエン著『放蕩息子の帰郷』を思い出しました。

通常このたとえ話では、自分勝手に享樂を尽くし皆から見捨てられた息子が父の元に戻り、父が彼を喜んで許し迎え入れる部分に目がいきがちです。しかしナウエンは、何もしないのに父に認められる弟に嫉妬する兄にも着目し、自分の心のなかにもこの嫉妬深い兄がいることを見いだします。そして、羨みや嫉みをもつ弱い人間である自分を認めることで、それでも世に生かされているのだという気づきを得ています。

良いことも悪いことも起こりうる人生です。どうぞ皆さん、自分の力を信じて、一步一步進んでください。困難は自分を見つめ直す機会です。自分を大事になさってください。あなたはあなた。他の何者にも代えられない存在なのですから。





教育人間科学部 4年 清原 杏子

卒業する、いま



この大学4年間、楽しかったことも苦しかったことも数えきれない。しかし、確実に言えるのは、私は変えられたということである。それも、神様によって変えられたという自信がある。

親元を離れ、一人暮らしをし、教会へ行き、大学では心理学に熱中した。高校までは勉強も信仰生活も最低限出来ればいいと熱が入りきらなかった私にとって、この4年間はそれらに全力で向き合う日々であった。全力で向き合うことは決して楽ではなく、上には上がいる現実や、努力が報われないことの連続だった。人間関係の悩み、将来への不安、自分の能力不足に苦しむことも多かった。

それでも頑張り続けられたのは、教会や青山学院大学での学校生活を通じて、神様がいつもそばにいてくださると実感できたからである。この4年間で自分がどう変わったのかは、今の時点でははっきりと分からない。しかし、多くの困難を経験し、確実に何かが変わったと感じている。これから社会に出たとき、「あの時、神様はこのために私を変えてくださったのだ」と実感し、喜べる日が来ることを期待したい。

私を励ました

聖書の言葉

一人ひとりを支え導いてくれた御言葉を綴っていただきました。

私たちは、
四方から苦難を受けても
行き詰まらず、
途方に暮れても失望せず

コリントの信徒への手紙二 4章8節

幼稚園保護者 朝倉 香苗

私を励ます聖書のことは

2人の娘を育てる中、娘達と日々のささやかな喜びを紡ぐ一方、理想通りにはいかない育児への不安やもどかしさ、母としての至らなさに悩み、暗闇の中にいた私を、光ある場所へと立ち返らせてくれたことばです。

どんなに苦しい時も、隣にはイエス様がいつもいて下さり、私の重荷を背負い共に歩んで下さる。

「私なんか」が常套句だった私が、「大丈夫。この私で良いのだ」と思えるようになり、気が付けば、いかばかりの困難なことがあったはずなのに、知らぬ間に乗り越えている自分がいました。

娘達は今、希望を胸いっぱい抱き、喜びの内に毎日を過ごしています。その喜びの中でも幾多の葛藤や困難に出会い、どうしてもなく高い壁が前に立ちはだかることもあるでしょう。そんな時でも必ず神様が守って下さっていること、そして神様の愛を知る先生方がそばにいて下さることを覚え、安心して一步一步進み、大きくなって欲しいと願います。





コリントの信徒への手紙二 4章17節

このしばらくの軽い苦難は、
私たちの内に働いて、比べものにならないほど
重みのある永遠の栄光を
もたらしてくれます。

初等部6年 石井 咲

私を支える大事な言葉

私が初等部生活の中で一番大事にした聖句。それは「このしばらくの軽い苦難は、私たちの内に働いて、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。」（Ⅱコリント4：17）という箇所だ。

この聖句との出会いは、五年生の二学期であった。プロジェクト活動や宿題等、高学年としての仕事に苦労し、心に余裕がなかった私は、朝の礼拝前の少しの時間に、この聖句に目をとめた。その時はいい聖句だな、くらいにしか思っていなかったが、時間を重ねていくうちに、この聖句は私の中で大切なものになっていった。プロジェクトのインタビューが進まない時、出された問題が難しかった時、もうだめだ、あきらめよう、そう思った時に、この聖句は私の頭に浮かび、もう少しがんばってみよう、という勇気を与えてくれた。私はこれまで、この聖句にずっと助けられてきた。これから先も、きっとたくさんの困難に私はぶつかるだろう。しかし、その先には、必ず大きな喜びが待っていると、私はそう信じて未来への道を歩んで行きたい。

一人より二人のほうが幸せだ。
共に労苦すれば、
彼らには幸せな報いがある。

コヘレトの言葉 4章 9節

中等部 3年 藤原 櫻子



寄り添える人に

私の中等部での3年間の生活を振り返るとこの聖句がぴったりであると感じています。

チアダンス部に入部し「誰かを応援し、元気づけること」をモットーに活動してきました。日々互いの長所を最大限生かせるように何十回、何百回も練習を重ねていきます。その中で誰もが悔しい思いや経験をし、時には涙も流しました。辛くてチアから離れたと思う時もありましたが、3年間全力で励むことができたのは支えてくれる家族や仲間がいてくれたからです。仲間と共に切磋琢磨することで想像以上の力を出せ、一人では味わえない感動を得ることができました。私は元々、人に頼らず自分の力で解決しようとしてしまうところがあります。ですが互いに支え合うことがいかに大切なことかチアダンスが教えてくれました。また誰かと共に時間を過ごす幸せを見つけられました。

人は一人では生きていけません。一人よりも二人が幸せだということ、助けてもらうのはとても大切なことだということを胸に刻み、同じような立場にある人に寄り添える人になりたいです。

人にしてもらいたいと思うことは何でも、
あなたがたも人にしなさい。

マタイによる福音書 7章 12節

高等部 3年 加藤 真那

人生の軸を決める

この3年間で挑戦して良かったことは、高等部の短期交換留学プログラムに参加したこと。イタリアからの留学生を自宅で受け入れ、イタリアでは私がホームステイさせてもらいました。



昨年4月にこの経験を礼拝で話す機会をいただいて感謝しています。イタリアの友人と関わる中で、彼女には自分の生き方の軸があるのだと感じる場面が多くありました。

まもなく卒業しますが、新しい環境になると、気持ちだけが先行してあらゆることに挑戦したくなったり、すべてのことを完璧にこなしたくなったりすることがあります。選択肢が広がりすぎて、何が重要なのか、優先順位がわからなくなってしまうのだと思います。最終的には、自分の人生で何を大切にするかということに繋がりますが、それを決めるのは容易ではありません。

そこで贈りたい聖句が、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」(マタイ7:12)です。3年間で何度も見聞きした聖句ですが、周囲にも良い影響を与える人になれるよう、学び続けたいと思います。



教育人間科学部 4年 澤田 七奈緒

善を行い続けること

私の大学生生活は、競技サーフィンと学業との両立に追われた日々でした。試合が近づいているのにレポートの提出期限が迫っていたり、授業があるため、思うように練習ができなかったりという生活で、時には「もう目標を達成できないかも」と思うこともありました。そんな時、神様から与えられた「失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることにになります」という御言葉が心の支えになりました。

この御言葉が与えられてから、私は立ち止まらずに自分にできることをひたすら続けました。その結果、課題をこなし、プロサーファーになるという目標も達成することができました。この経験を通じて、どんなに苦しい時でも、立ち止まらずに善を行うことの大切さを実感しました。大学生の中にはアルバイトやサークル、授業で忙しい人も多いと思いますが、目の前のやるべき事を続けていくことは本当に意味があることだと感じます。努力を続ける先には、必ず神様からの恵みと祝福が待っているはずです。たくさんのことにチャレンジし、後悔のない学生生活を！

失望せずに善を行いましょう。
あきらめずに続ければ、
時が来て刈り取ることにになります。

ガラテヤ人への手紙 6章9節（新改訳2017）



編集後記

Wesley Hall News147号をお届けできることを幸いに存じます。卒業式は英語ではcommencement（コメンズメント）といいます。このことばの意味は「始まり」。新しい世界への出発がcommencementなのです。そして、その意味でこの冊子を読んでもいただけたと思います。

青山学院で過ごした日々は、すべての卒業生にとって特別な意味を持っているはずです。それは、まぎれもなく主とともに歩んだ日々だということです。卒業したからといって主の祝福から漏れることはありません。しかし、イエス・キリストをそばに感じる機会をもしかすると減ってしまうかもしれません。だからこそ忘れないで欲しいのです。あなたはイエス・キリストに選ばれ、この学校に來たのです。主の選びの民なのです。「地の塩、世の光」。一生かけてその恵みの深さを味わっていただけると幸いです。イエス・キリストに喜ばれる人生は、あなたにとって豊かな人生になるはずです。

この春、卒業する人もそうでない人も青山で受けてきたキリストの香りをたっぷり身にまとい、次のステップに歩み出してください。

高等部教諭 池田 敏

Wesley Hall News 第147号

2025 年 3月3日 発行

発行 青山学院宗教センター
学院宗教部長 伊藤 悟
編集 青山学院 Wesley Hall News 編集委員会
〒150-8366
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL 03-3409-6537 FAX 03-3409-8865
デザイン 株式会社バットンファイヴ
印刷 株式会社スバルグラフィック

URL <https://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>
MAIL agcac@aoyamagakuin.jp みなさんの感想をお聞かせください

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(マタイによる福音書 第5章 13-16 節より)